
仮面ライダーW ~ Another World Returns ~

亀鳥虎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW Another World Returns

【Nコード】

N9324Z

【作者名】

亀鳥虎龍

【あらすじ】

神都を護る戦士『仮面ライダー』そんな彼等を待ち受ける物語が今、再び始まった。

『仮面ライダーW Another World story』
の続編始動！ 格ライダーの物語を中心に再始動する！！

1 - 1話：切り開くF / 巻き込まれた男（前書き）

あの物語が再び！

1 - 1話：切り開くF / 巻き込まれた男

ユーノ・スクライア……上条当麻の相棒にして、高町なのはを妻に持つ青年。

そんな彼は、養子のヴィヴィオとなのはが宿した新たな命の父親でもある。

今回は、彼を中心にした物語が始まったのであった。

切り開くF / 巻き込まれた男

藍染惣右介率いる組織の起こした『英霊の記憶』事件から数日後…

「ふうー、こんなモノかな？」

ユーノ・スクライアは、相棒の上条当麻と共に久々の『万時屋』家業に勤しんでいた。

すると、突如電話が鳴り出した。

「もしもし？」

受話器を手に取ったユーノ。

『僕だ』

電話の相手は悪友のクロノ・ハラオウン。

「何だお前か？」

『随分な挨拶だな。折角仕事の依頼を持って来てやったのに』

それを聞いたユーノは、溜め息まじりでこう言った。

「で、依頼は？」

『実は新しい資料が届いているんだが、中々まとまっていらないんだ』

「その資料の片付けの手伝いをして欲しいと？」

『そうなるな』

「分かったよ。ただし、報酬は弾めよ」

そう言っただけで電話を切り、ユーノはすぐさまコートを羽織った。

「じゃあ、当麻君。行ってくるよ」

「気を付けるよ。後今日は出産日だからな」

「分かってるよ」

実はなのはは、新たな命を身籠っていて、その出産のために病院に入院しているのである。

以前ユーノは、なのはと“一緒に出産に立ち会う”という約束をしていたので、今日はその約束の日なのであった。

警視庁の資料室に入ったユーノであったが、

「な……何これ？」

分厚すぎる資料の量に驚きを隠せなかった。

「実は整理を頼んでいた刑事が仕事をサボったのでな……全く整理できてないのだ」

「何処のどいつだよその刑事は！」

「無論、そいつらにも然るべき処分をする」

因みにサボった刑事というのは、石垣と真倉である。

「分かったよ、出来るだけ半分以上に減らすから」

「そうしてくれ、報酬は高く払うから」

そう言ってクロノは資料室を後にし、ユーノは資料の整理を急いだのであった。

一方その頃、病院では……

「そっか……ユ一ノ君、来れないのか」

出産を迎えているのはな、夫が来ない事で少し寂しくなった。

「心配すんな。アイツは約束を破るようなヤツじゃないからな」

それを聞いたなのはは、少し元気になった。

「んじゃ、俺は一回事務所に戻るけど……何かあったら呼んでくれよな」

そう言って上条は病室を後にした。

資料室で資料の整理を行っていたユーノ。

「ふう……やっとこんなモンか」

そう言って先程の2分の1を片付けたのである。

すると、一人の人物が現れた。

「失礼するよ」

この街の警視庁の刑事・笹塚衛士であった。

「はい、これ差し入れ」

そう言って笹塚は、缶コーヒーを彼に渡した。

「あ、すみません」

「まあ、本来は俺達警察のやることだからな。 キレの良いところ
で止めても構わないよ」

笹塚は最後にそう言って立ち去ったのであった。

「よし、早く終わらせないとな」

再びユーノは資料に目を通したのであった。

資料の整理を行って30分後。

「ユーノ君、差し入れ持ってきたで」

そう言つて八神はやてが弁当を持ってきたのである。

「すまないはやて」

「ええよ、ええよ。これくらいは朝飯前や」

するとはやては、資料室に目をやると、

「大分片付いたんやな」

「まあね」

「ユーノ君、何時も思ってたことやけど……」

「ん？」

「ユーノ君は何でもかんでも背負い過ぎや、少しは誰かに甘えたりせえへんの？」

「そ、それは……無いかな……甘えたくても甘えられなかったから」

「あ……スマン、つい……」

「良いよ、はやてだって悪気は無かったんだし」

「じゃあ、私は失礼するで」

そう言うてはやては資料室を後のした。

一方の警視庁内では、覆面を被った男達が銃を持っていた。

「俺達は『避ける鬪魂』だ！ この警視庁は俺達が支配した！！！」

そう言っつて引き金を引いたのであった。

「わああああああ」

「きゃーーーーー！！！」

「騒ぐんじゃネエエエエエエ！！！」

テロリストに占拠された警視庁は一体どうなるのであろうか、そしてユーノの運命は！？

〈3年W組 上条先生〉

上条

「はい、皆さんお久しぶりです。久々にご登場させていただきましたので一つだけ言っておこうと思います。この小説は文が短いので、『上条先生』で行数を稼いでいるのでご注意ください貰いたいです。以上！」

一方通行

「……………大丈夫かよ、この小説？」

上条

「大丈夫だ……………多分」

一方通行

「多分かよ!？」

1 - 1話：切り開くF / 巻き込まれた男（後書き）

次回、切り開くF / 強がらなくても良い

1 - 2 話・切り開くF / 強がらなくても良い (前書き)

後編です。

1 - 2話：切り開くFノ強がらなくても良い

神都のとある病院。

「よう、お待ちせ」

上条とインデックスが、差し入れを持って病室を訪れた。

そこには、なのはだけでなく高町家の人々もいた。

「　　ってあれ？ ユーノは？」

しかし、一番重要な人物が現れていなかった。

すると、テレビであるニュースが流れた。

『臨時ニュースをお伝えします。 たった今入った情報で、警視庁をテロリスト集団が占拠したという通報がありました』

「え!?!」

上条はそのニュースを聞いて、背筋をゾクリと凍らせた。

「まさか……………」

その時であった、

「……………」

「え、なのは!？」

突如なのはが苦しみ出したのだった。

「俺、ちょっと外を見てくるわ！」

「あ、とうま！」

上条は襲いで外に出ると、携帯電話に手を掛けた。

無論、電話の相手は……

切り開くFノ強がらなくても良い

資料室からも響いた銃声に反応したユーノ。

「銃声！？」

すると、彼の携帯電話が鳴り出し、ユーノは電話を取った。

「はい！」

『相棒、無事か？』

「当麻！」

相手は相棒の上条当麻。

『状況は！？』

「資料室からも銃声が聞こえただけで……」

『俺もニュースで聞いたただだから詳しく分からない。ただ、警視庁内にテロリストがいるってことだ』

「冗談だろ！？ 僕だってやっとで資料が半分以上終わったところなのに」

『いや、それは別に良いだろ！？ 後でクロノに請求すれば良いじゃないか！』

「それで、どうする？」

『俺は状況を把握して、裏口から回る』

「分かった、僕は中から何とかするよ」

『気を付けるよ、相棒！』

そう言っただけで二人は電話を切った。

「（サイクロンに変身しても良いけど、生憎ロストドライバーは持って来てないし……………）」

ユーノは懐を確認するが、

「あ……………」

あるモノが無い事に気付く。

「しまった……………メモリが……………」

それは、サイクロンを始めとする所有メモリが無い事であった。

「クソッ、余り使わないと思ってデスクに置きっ放しだった」

ユーノは今回の自分のミスを後悔してしまふ。

裏口から入った上条は、ユーノのメモリを眺めながら呟く。

「とうかアイツ……いくら事件が起きてねえからって、メモリを忘れやがって」

文句を言いつつも、メモリを手に持って来ている上条。

「さて、どう動くか……」

「つうかよオ、どオせなら連中を攪乱させた方が良インじゃねエか？」

アクセアレータ
一方通行と浜面仕上の二人も一緒に来ていた。

病院を出た際、最初に二人に電話掛けた上条は、助太刀を依頼したのだった。

「さて、どうするんだ？ 攪乱って言っても、相手は武器持ってる

ぜ？」

上条がそう言うが、浜面がこう答えた。

「とりあえず一人は連中のフリをして、もオ一人が連中を潰していく、そしてオマエが相棒を助けに行く」

「成程な」

そう言つて三人は、実行に移つたのであつた。

庁内を歩き回る『避ける闘魂』の一人。

彼らは嘗ての『萌える闘魂』のメンバーで、捕まつた仲間たちの解放を目的で警視庁を乗っ取つたのであつた。

「まったく、何が見回りだよ……」

団員が文句を言いながらも見回りをする。

しかし、その時であった。

カランカランと何かが転がっていた。

「んあ？ 何だこりゃ？」

団員がそれを拾った瞬間、

「動くなよ」

後ろから掛けた声に、ゾクリと背筋を凍らせた。

「動くなよ？ 動いたら命はねエと思え」

その人物はそう言って、団員の頭に銃口を突き付ける。

「安心しろ、命までは取らねエ。暫らく寝て貰うぜエ」

「ガッ！」

『彼』は団員の頭を殴って気絶させた。

「さて、どうするか……」

ユーノは資料室を出た後、周りを確認しながら歩き出す。

「どうするか……」

すると彼は、ある場所を眺めた。

「クソッ、見張りか……」

そこには多くの見張りが銃を構えていた。

「どうすれば……」

そう言ってユーノは慎重に窺うが、

「動くな！」

「……」

後ろから頭に銃口を向けられてしまう。

「手を挙げる！」

「……………」

指示に従い、向こうへと歩く。

「おい、まだサツがいたぜ」

警察と勘違いされているようで、流石のユーノも身動きが取れなかった。

「此方B班。警察の人間と思いき男を発見した。 応答を」

団員の一人が仲間連絡を入れようとするが、

『ギヤアアアアアアアアアアアアアア!!』

「!?!」

突如、彼等の仲間の叫び声が聞こえ、

「おい、どうした!?! 応答しろ!!」

男が連絡するも、応答がない。

暫らく経ってから、トランシーバーから声が聞こえた。

『ハア〜イ、クソ野郎共。 今からテメエ等を地獄に送ってやるよ
オ』

その声を聞いた彼らは、ゾクリと背筋を凍らせた。

警視庁のとある部屋。

「フフフフ……悪く思っなよ？」

「クッ」

リーダーと思いき男が、クロノに銃を突きつけていた。

すると男は、懐からメモリを取り出し、

【スコープピオン】

それを首元に差し込んだ。

その瞬間、男はサソリを模した怪人・スコープピオンドーパントと化した。

「ガイアメモリだと！？ 組織は壊滅したはずじゃー！」

「裏社会を舐めんなってことだよ」

スコープオンダーパントはそう言ってクロノに顔を近づけるが、

「成程、そういう事か」

「「!?!」」

突然の声に二人は驚きを隠せなかった。

「よう、クロノ」

そこには、上条当麻とユーノ・スクライアの二人がいた。

「まったく、テロに捕まる警視庁か……コリヤ笑いもんだぞ?」

そう言って上条は、ダブルドライバーを装着し、ユーノの腰にもドライバーが出現する。

「んじゃ……とつとと済ませるぞ、相棒」

「ああ、勿論。 来い、ファング！」

その瞬間、何処からかともなくフェングメモリが出現し、手に乗せたユーノがメモリモードに変形させた。

【FANG】

【JOKER】

「「変身……！」」

上条がジョーカーメモリを差し込んだと同時に、ユーノのドライバーに転送され、転送されたメモリをユーノが差し込んだ後にファングを差し込んだ。

【FANG・JOKER】

その瞬間、ユーノの姿が白い右半身に黒の左半身、鋭さを思わせるボディにW型の触覚と赤い複眼の戦士に変身した。

白き切り札、仮面ライダーW・ファングジョーカーが此処に光臨した。

「ガウ！」

Wはスコープオンダーパントに突撃し、そのままガラスを突き破って外へと落ちたのであった。

スコーピオンドーパントを地面に叩きつけたWは、タクティカルホーンを一回弾いた。

【ARM FANG】

アームセイバーを振るい、スコーピオンドーパントを切り裂くW。

「ハッ！」

「ガア！」

容赦無く吹き飛ばされたスコーピオンドーパントは、

「クソガッ！」

頭部の装飾の尻尾の部分が鞭の様に伸び、先端の針で刺し殺そうとするが、

「ウラァ！」

Wはアームセイバーで切り落とした。

「一気に決めてやるよ！」

そう言つてWは、タクティカルホーンを三回弾き、

【FANG MAXIMUMDRIVE】

マキシマムセイバーを出現させ、

「「フアングストライザー!!!」」

回転蹴りの要領で放つフアングジョーカーの必殺技『フアングストライザー』が、見事に炸裂した。

「ガアアアアアアアアアアアア!!!」

『フアングストライザー』を喰らつたスコピオンドーパントは、爆発と同時に元の男の姿に戻り、メモリも砕けたのであった。

「んじゃ、早くお前は病院に行け。もうすぐ出産みてえだぞ？」

「え、ホント!?!」

「俺から伝えとくから」

「すまない!」

そう言って変身を解除したユーノは、すぐさま病院に向かったの
であった。

病院に駆けつけたユーノ。

「なのは！」

「ゆ、ユーノ……君」

苦しみながらもその姿を確認したなのは。

「しっかり……」

「来て……くれたんだ」

「約束したからね」

そう言って二人は、看護師達や助産師と共に緊急治療室へと向かっ
た。

なのはが緊急治療室に入って数分後、

「なのはが出産って本当ですか!?!」

桃子からの連絡を受けたフェイトも駆けつけ、扉の前は緊張でソワソワしていた。

暫らくたって数分後、

「オギャアー！ オギャアー！」

大声で泣く子供の声が聞こえた。

「産まれたようね」

「ホッ……」

桃子もフェイトも、その鳴き声を聞いて安堵したのであった。

緊急治療室の方では、

「おめでとう御座います。 男の子です」

そう言つて元気に泣く赤ん坊を二人に見せる看護師。

「良かった……」

「頑張ったね、なのは」

「うん／＼／＼／」

歡喜の涙を流しながら、二人は新たに生まれた家族の顔を眺めたのであった。

その翌朝、ユーノは病室に来ていた。

「赤ちゃんは？」

「寝てるよ」

ベッドの上のなのはは、腕の中に抱かれている赤ん坊を抱きながら笑顔を見せた。

「可愛いね」

「うん」

スヤスヤと眠る我が子を見て、ユーノはこう言いだした。

「そう言えば、この子の名前……考えたんだけど……」

「ん？ 何々？」

ユーノは息子の名前をユツクリ教える。

「佑希^{ユウキ}……“多くの人々を助け、希望を持たせる人間”という意味を込められてるけど、どうかな？」

それを聞いたなのはも気に入ったようで、笑顔で答えた。

「良い……凄く良い名前だよ」

「良かった」

「ユーノ君、ちょっと……」

「ん？」

するとなのはは、ユーノの顔を自分の顔に近づけ、そのまま唇を合わせた。

「ん！？」

「ん……んは……」

「な、なのは？」

驚くユーノに、なのはは優しく言った。

「ユーノ君、もう自分で抱えようとしなくて、時にはめい一杯甘えてね／＼／＼／」

「なのは……」

自分の抱えている事を既に見抜いた妻の思いを胸に、ユーノはなのはを優しく抱きしめた。

「……………有難う」

その目には、一粒の涙が零れていた。

一方、警視庁では……

「なななななな何だこれはアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

「何って依頼料の請求書！ ソレぐらいは当たり前だろ？」

上条当麻は、クロノに依頼料の請求書を見せた後、そのまま机に叩き付けた。

「言っておくが、上条さんは本気ですからね。しっかりと払ってもらいますからね！！」

過去にクロノからの依頼の分を含めた依頼料の金額は、既に10万
以上を超えていた。

すっかり忘れていたとはいえ、請求金額を見て愕然としたクロノは、

「不幸だアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

『ムンクの叫び』のようなリアクションで叫んだのであった。

1 - 2話：切り開くFノ強がらなくても良い（後書き）

次回は第二章・ショーカー篇です。

第1話・やって来たSノ若き『骸骨』の登場(前書き)

桐生乱桐さんの希望で、あるキャラを準レギュラーにしたいと思
います。

第1話：やって来たSノ若き『骸骨』の登場

とある世界、そこに一人の少年がいた。

「ふう、こんなもんか」

彼の名は鏡祢アラタ。かがみね

『とある魔術の禁書目録』インデックス 戦いの神と呼ばれた男』の主人公で、複雑な理由で魔術師の下で働いている。

上司・蒼崎橙子の受けた仕事を終え、そのまま帰るつもりであったが、

「!?!? 何だよ、コレ!?!?」

突如現れたオーロラに、驚きを隠せなかった。

しかし、彼の中の何かが語りだした。

「何なんだこのオーロラは……事件の予感がする」

そう思い、彼は事件の予感と好奇心を持ちながら、その中へと入ったのであった。

「スマンなアラタ、少し遅れ」

その数分後、蒼崎橙子が戻ってくるも、

「あれ、アラタ？」

しかし、そこには誰も居なかった。

やって来たS / 若き『骸骨』の登場

上条当麻は何時もの不幸体質が災いした。

「ハア……不幸だあ……財布を何処かに落とすわ、何も無いところ
で13回転ぶわ、13回も靴紐が切れるわ、ホントに不幸だ……」

溜め息を付きながらも、上条は歩いていた。

それにしても、13回も転んだり靴紐が切れたり、どれだけ不幸
体質なんでしょう？

「作者、それは俺が聞きたいよ」

そんな彼に、更なる不幸(?)が舞い降りてきた。

というより、落ちてきた。

「ん??」

突如頭上が暗くなったコトに気付き、空を見上げると……

「うわあああああああ!」

「んが!」

突如一人の人間が落ちてきて、そのまま上条の上に落ちたのであつ
た。

「いつてえ~~~~~」

涙目でそう言つと、

「悪い！」

その人物は詫びながら上条の上を降りた。

「不幸だあゝ。まさか空から人が落ちてくるなんて……」

鏡祢アラタは、どういふわけか空から落下してきた。

そしてそのまま、偶然人の上に落ちてしまふ。

「悪い！」

その人物に詫びながら降りた。

「不幸だあゝ。まさか空から人が落ちてくるなんて……」

そう言つて彼はネガティブになつてしまつが、

「ん？」

アラタはその人物の顔を見て、少し驚いてしまつ。

「（この人……当麻に似てないか？）」

そう思いながら手を差し伸べた。

「とりあえずスマナイ。ワケありで落ちてしまつたんだ」

「ワケありつて、どんなワケがあつて空から人が落下するんですか？」

「だよなあゝ」

青年の問いにアラタは、少し苦笑いをしてしまった。

二人は近くの公園で休憩し、ジュースを飲む。

因みにジュースは上条の奢りである。

「そついや、名前聞いてねえな。俺は上条当麻だ」

そう言って右手を差し出す上条に、

「あ、ああ……鏡祢アラタだ」

アラタは左手を握って握手する。

その瞬間アラタは、内心思ったのだった。

「（もしかして……この世界の当麻なのか？）」

元の世界では同級生の少年が、18歳の青年になっていたので少し驚いた。

「ところで、アラタは何で空から降ってきたんだ？」

上条の問いに、アラタは少し悩んだ後にこう答えた。

「え〜と……上条……さん……」

「あ、当麻で良いよ。わりと年齢は近いし、それとタメ口で構わな
いぞ」

「そうか、んじゃ……当麻、一つ言っておきたいんだけど……」

「ん、何だ？」

「お前……『異世界』って言うのを信じるか？」

「え!？」

それを聞いた上条は、少し驚いたのだった。

「まあ……お前が来る少し前に、異世界から来たヤツがいたからな」

“異世界からの来訪者”について、上条は少しだけ語りだした。

それを聞いたアラタは、少し驚いてしまいが、すぐに納得した。

因みに、上条が何故“異世界からの来訪者”について驚かなかったのは、前作『仮面ライダーAnother world story』を読んで下さい。

「それにしても、お前の世界の『俺』も記憶喪失か……」

上条はアラタの話を聞いて、“彼の世界の自分が記憶喪失になっている事”を知るが、自分も記憶喪失であるため、予想は付いていたような態度を見せる。

「ところでアラタ。お前、宛があるのか？」

「あ、そう言えば……」

食事や衣服は何かなるが、肝心の住む場所が無ければ、生活が辛い状況になる。

「もし良かったら、俺の事務所に来ないか？」

「良いのか!？」

「ああ。部屋も結構空いてるし、メシも一応あるぞ?」

それを聞いたアラタは、

「（どの世界でも、当麻のお人良しは変わんねえな）」

目の前の『上条当麻』の優しさ（と言っ名のお節介）に少し感心し、

「んじゃ、よろしく頼むぜ」

「おう！」

彼が所長を務める『万時屋』で居候になるのであった。

事務所まで歩く二人であったが、

「あ、悪い」

プルプルプルと上条の携帯電話が鳴り出し、彼はそれをポケットから取り出した。

「もしもし？」

『当麻、僕だ！』

「ユーノか！？ どうした！」

『実は“例の行方不明事件”の依頼が来たんだ。すぐに戻ってきてくれ！！』

「分かった！」

そう言っつて上条は電話を切った。

「アラタ、イキナリで悪いんだけど、初仕事だ！」

「ああ、何時でも良いぜ！」

血相を掻く上条に、アラタは笑いながら答え、

「とりあえず、事務所まで走るぞ！」

「おう！」

二人は、事務所まで走り出したのであった。

「ちょっと、上条先生！」

上条

「はい、明けましておめでとう御座います。久しぶりにこのコーナーをやらせて貰います。次回からは、この皆さんの小説に関する質問をお答えしたいと思います」

アラタ

「次回からは、俺も戦いに出るから宜しくな」

上条

「というワケで作者。暫らく廊下に立ってなさい!!」

アラタ

「意味あるのか？」

上条

「特になし！」

アラタ

「無いのかよ!?!」

第1話・やって来たSノ若き『骸骨』の登場（後書き）

桐生乱桐さん、準レギュラーを有難う御座います！

そしてこれが、2012年初の投稿です。

第2話・やって来たSノさあ、お前の罪を数えろ！（前書き）

遂に、骸骨戦士と疾風の切り札が！

第2話：やって来たSノさあ、お前の罪を数える！

仮面ライダーW Another World Returns

く、前回の三つの出来事。

一つ…鏡祢アラタが謎のオーロラに飛び込む。

二つ…上条とアラタが出会う。

三つ…ユーノの連絡を受けた二人は、事務所に戻る so であつた。

事務所に戻つた上条は、一度アラタを紹介した後、ユーノから事件の内容を耳に入れた。

事件内容は、毎晩女性が行方不明になつてしまふという事件が起きており、上条達を受けるのは、その犯人を捕まえる事であつた。

「僕は検索を開始するから、事件の手掛かりになるモノを見つけてくれないか？」

「了解、頼むぜ相棒！」

そう言つて上条は、アラタと共に外へ出たのであつた。

やって来たSノ二大ライダー見参！

行方不明があつた場所へ向かうと、二人は疑問を感じ取つた。

「オカシイ……………」

「ああ。　コレだけ広い現場で、誰も気付かないっていうところが……………」

人目に付きそうな場所で事件が起きていると分かつた二人であつた

が、此処で違和感を感じた。

「犯人は、ワザと人目に着きそうな場所で犯行を行っている」

「他に何か手掛かりがあれば良いんだけど……」

すると、上条の携帯電話が鳴りだした。

「もしもし?」

『あ、上条さんですか? 初春です』

電話に出ると、初春飾利の声が聞こえた。

「おう、どうしたんだ?」

『実は、警察が万時屋に連続行方不明事件の依頼を申し出たという情報を耳にしまして』

「……何か分かったのか!？」

『ええ、調べた結果……行方不明になっている女性は皆茶髪だった
そうです』

「茶髪？」

『ええ。それ以外の情報は、未だに掴めませんが』

「いや、助かったよ。サンキューな」

電話を切った上条は、すぐさま相棒に連絡する。

「もしもしユーノ？ 検索して欲しい事があるんだ」

その際、アラタはある事に気付いた。

「ん……まさか……」

「『女性』……『夜』……『茶髪』……此処までは分かった。で
も流石にコレだけでは絞れないよ？」

『ワインスマン賢者』を発動させたユーノは、自らの個人現実パーソナルリアリティに飛び込んでいた。

『マジかよ……参ったな……』

上条が電話の向こうで困っているが、

『ユーノさん、『鏡』じゃダメですか？』

その瞬間、バラバラの謎パズルが一つになった。

「ビンゴだよ、アラタ君！」

『ヤツパ鏡でしたか……』

「ああ、これで相手の正体が割り出せる」

そしてユーノは、二人に犯人の正体を教えた。

その夜、一人の女性が大通りを歩いていった。

彼女が鏡の前を通り過ぎた瞬間であった。

「シャアアアアアアアアア！」

一体の怪人が、女性に向かって飛び掛かって来たのだ。

だがしかし、思わぬ出来事に遭遇する。

「ちえいさアアアア！」

まるで予期していたかのように、彼女は回し蹴りを叩き込んだのだ。
った。

「ガッ！」

吹き飛ばされた怪人に、二人の人物が現れた。

「待ってたぜ、この変態ヤロウ！」

上条当麻と、鏡祢アラタである。

「お前等……何故此処が!？」

怪人・ミラードーパントが驚きを隠せずにしたので、上条が堂々と答えた。

「簡単な事だ。まず、なぜ被害者たちは大通りで行方不明になったのか……これはロードミラーや鏡、もしくは姿が映る物がある場所を犯人が選んでいたとしか考えられないからな」

さらにアラタが、追い討ちを掛けるようにこう言ったのだった。

「その犯行に使うメモリはミラー……即ち鏡のメモリだ。鏡の中を移動すれば、誰だって見つからないからな」

「おのれええええええええええ！ ぶっ殺してやる!!」

遂に怒りを露にしたミラードーパントであったが、アラタと上条は平然にこう言った。

「やれるもんならやってみろ」

「だが、その頃にはアンタは八つ裂きになってるかもしれないけどな!」

「……って、何で『刀語』？」

「一度言ってみたかった」

そして二人は、ドライバーを装着し、メモリを構えたのであった。

無論、事務所のユーノも、ドライバーを通して意志は伝わっている。

【SOUL】

【CYCLONE】

【JOKER】

「「!?!?」」

互いに相手のメモリに驚きを隠せない二人であったが、目の前の敵に集中した。

「「「変身!」」」

アラタは一度帽子を脱いだ後にメモリを差し込み、スロットを横に倒した。

【SOUL】

上条はドライバーに転送されたユーノのメモリを差し込み、それに続くようにジョーカーメモリを差し込んで横に倒した。

【CYCLONE・JOKER】

上条とユーノはWに変身し、アラタは骸骨のようなマスクに黒いボディの戦士に変身して一度脱いだ帽子をS字型の傷を隠すように再び被った。

疾風の切り札・仮面ライダーWと若き『骸骨の記憶』の戦士・仮面ライダースカルが今、肩を並べて立っていたのであった。

「「「さあ、お前の罪を数えろ」「」」

ミラードーパントに跳び込むように、キックを叩き込んだW。

しかしミラードーパントは、すぐに避けると、鏡へ走り出したのであった。

それを見たスカルは、すぐさまマグナムを取り出して引き金を引いた。

放たれた弾丸は、鏡に命中してパリンと割れたのだった。

「な!？」

「いくらお前でも、鏡を失ったら逃げ道は無いよな？」

スカルは深く帽子を被り、ミラーダーパントに銃口を向ける。

ドンドンと放たれる弾丸を受け、ミラーダーパントは逃げる方法と体力、そして余裕を失ったのであった。

「これで決めるぜ」

【SOUL・TRIGGER】

上条がそう言った後、Wはスカルトリガーにチェンジし、スカルと肩を並べる。

「いくぜ、アラタ」

「……………ああ」

二人はマグナムのスロットにスカルメモリを差し込み、トドメに入った。

【SOUL MAXIMUMDRIVE】

「クツ……………クソオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

恐怖を感じ取ったミラーダーパントは、再び逃走するも、それは完全に意味が無くなったのだった。

「……ライダー……………ツインマキシマム！」

銃口から放たれる髑髏状を模した紫の弾丸は、そのまま真っ直ぐに

ミラードーパントに命中し、

「グワアアアアアアアア！」

ミラードーパントは、その場で爆発したのだった。

ミラーメモリは砕け、メモリの所持者である男も逮捕された。

そして行方不明の女性たちも無事に救出され、事件は解決したのだった。

「というワケで、新ためてウチの事務所に働く事になった鏡祢アラタだ。皆、仲良くするように」

「宜しくお願いします　って転校生が来た時の学校かよ!？」

突然の上条のポケに、アラタは見事にツッコミを入れた。

「ユーノ・スクライアだ。分からない事は、何時でも聞いてくれ」

「妻のなのは・スクライアです。宜しくね」

「インデックスって言うんだよ。 あらた、宜しくなんだよ」

「紫馬アトリ、宜しく」

「よし。 挨拶も済んだ事だし、今夜はアラタの歓迎会だ！」

こうして、鏡祢アラタは万時屋メンバーの一員となったのであった。

「教えて、上条先生」

上条

「はい、久しぶりに来たお便りをご紹介したいと思いますペンネーム『鳴神ソラ』さんのキャラからの質問です」

マリオ

「別世界の主人公が来たな」

ネス

「そうだね」

アング

「これはコア大戦を元にしてるのだろうか…メモリーメモリでの過去を見るのは誰なのやら」

リュカ

「そうですね…」

ルイージ

「早速質問です『赤ちゃんを見た感想は?』」

アング

「質問だ『それぞれの章は何の話を元にしてるんだ?』」

次回を待ってます!

〜質問?〜

ユーノ

「もう、とても可愛いとしか言いようがないよ。髪の色と笑顔はなのはそっくりだし　／＼／＼／」

なのは

「瞳が翡翠色なのは、ユーノ君譲りでとても可愛いの／＼／＼／」

ヴィヴィオ

「可愛すぎて、思わず胸がキュンってなるの！／＼／＼／」

（質問？）

虎龍

「特に何もありません」

上条

「というワケで、次回も宜しく」

第2話・やって来たSノさあ、お前の罪を数えろ！（後書き）

次回も宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9324z/>

仮面ライダーW ~ Another World Returns ~

2012年1月4日06時46分発行